

演題番号：A9

## 虚弱子牛症候群が疑われた子牛にみられた深在性真菌症

○高見成昭，家久保可奈子，下茂絵里奈，大平真由，関口美香，吉本真朗

大阪府家保

1. はじめに：子牛の疾病の中で肺炎及び下痢は特に注意が必要である。それらの原因は、細菌、ウイルスなど様々であるが、常在菌である細菌及び真菌により日和見的に発症する場合もあり、発症の予防には子牛の免疫能が重要である。今回、下痢症状を呈し死亡した子牛の病性鑑定を実施し、死亡原因及び発症要因を検討した。

2. 材料および方法：17日齢の肉用子牛(交雑種、雌)で、出生時より体格が小さく、斃死数日前から水様性下痢を発症し、その後起立不能となり、死亡した。剖検を実施し、全身諸臓器を採材、定法に従いヘマトキシリン・エオジン染色標本作製し、病理組織学的検査を行った。病因検索として、主要臓器を用いて細菌並びに真菌学的検査及びウイルス学的検査を実施した。

3. 結果：(1)肉眼所見：外観にて眼球は陥没し、肛門周囲及び尾に便の付着がみられた。剖検により、肺の全葉性に最大直径10 mmの褐色斑が多数認められ、回腸及び回盲部には帯黄色内容物が充満していた。剖検時体重は31 kgで、胸腺の低形成がみられた。(2)組織学的所見：多数の菌糸状物を伴う多巣状性の出血性壊死性肺炎並びに第四胃、空腸及び回腸

において化膿性胃腸炎が認められた。菌糸状物は、PAS反応及びグロコット染色の結果から真菌と判断された。肺の真菌の形態は、幅は均一で隔壁があり、Y字状分岐を示し、免疫染色ではマウス抗*Aspergillus*抗体(Dako)に陽性であり、消化管の真菌の形態は、分岐性仮性菌糸、真性菌糸及び酵母様で、免疫染色ではウサギ抗*Candida albicans*抗体(Biogenesis)に陽性であった。その他、腎臓では多発性の急性尿細管壊死が、胸腺等のリンパ系組織ではリンパ球の減少が認められた。(3)病原検索：主要臓器から病変形成に関与する細菌及びウイルスの病原体は検出されず、肺からアスペルギルス属真菌が分離された。

4. 考察および結語：肺はアスペルギルス属真菌による出血性壊死性肺炎、消化管はカンジダ属真菌による真菌性胃腸炎と診断され、異なる臓器・組織における異なる菌種による真菌感染症は、稀な症例と思われた。死因は、下痢による脱水を背景に肺炎、胃腸炎及び腎尿細管壊死による多臓器・組織障害と考えられた。発症要因として、出生時低体重及び胸腺低形成などから虚弱子牛症候群が疑われ、免疫機能低下状態であったことが示唆された。